



SCB

ニュース&トピックス

No.2024-141

(2025.2.5)

信金中央金庫 地域・中小企業研究所

研究員 西 俊樹

03-5202-7671

s1000790@FacetoFace.ne.jp

データで読み解くこれからの信用金庫経営 (44) OHR (コア業務粗利益ベース) の動向

—信用金庫のOHRは低下傾向にある—

ポイント

- 全国信用金庫におけるOHR (コア業務粗利益ベース) の推移をみると、2018 年度以降は低下傾向であり、2023 年度は前期比 0.56 ポイント低下の 71.95% となった。
- 業態別では、信用金庫のOHRは、低下傾向にあるものの、都市銀行、地方銀行を上回り推移している。また、2021 年度以降は第二地方銀行をやや上回り推移している。
- 信用金庫別のOHRを2期間比較(2019 年度と 2023 年度)で確認したところ、上昇 26 金庫、低下 228 金庫と、低下金庫が多くなっている。

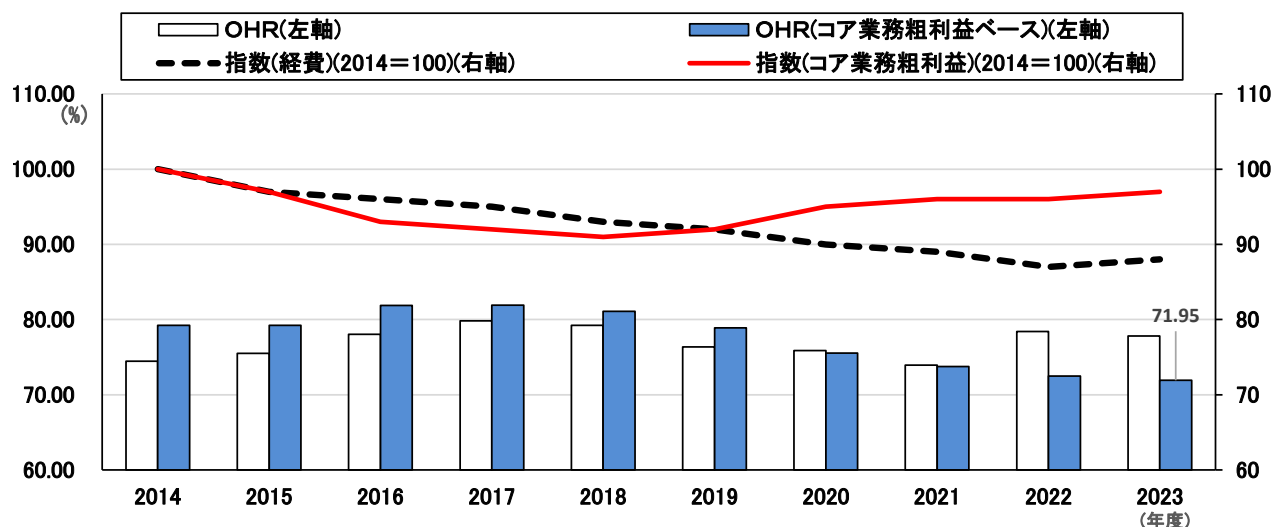
1. OHR (全国) の状況

経費効率をみる指標としてOHR (経費／業務粗利益)を確認する。なお、本稿では、信用金庫の本業部分での収益性をあらわすコア業務粗利益¹ベースのOHRを取り上げる。

全国信用金庫における 2014 年度以降のOHRの推移を確認する(図表 1)。OHRの推移をみると、2018年度以降は低下傾向であり、2023年度は前期比0.56ポイント低下の71.95%となった。

経費額およびコア業務粗利益について 2014 年度を 100 として指数化すると、経費額減少の影響の方が大きく、OHRの低下により大きく寄与している。

(図表 1) OHR(コア業務粗利益ベース・全国)の状況



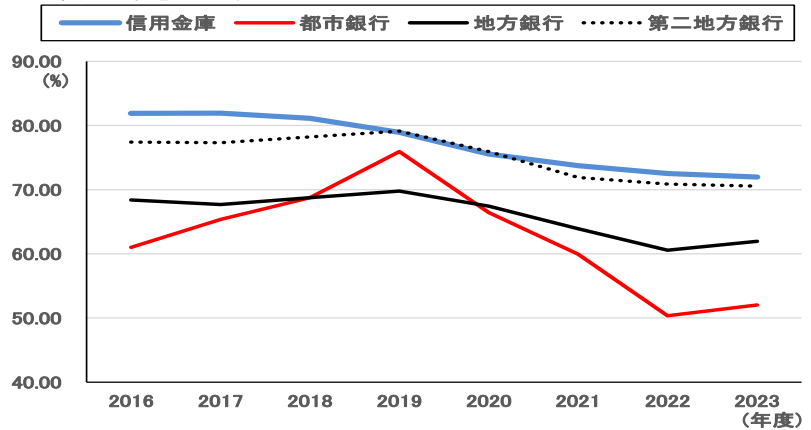
(備考) 信金中央金庫 地域・中小企業研究所作成

¹ コア業務粗利益＝業務粗利益－債券５勘定戻(国債等債券売却益＋国債等債券償還益)－(国債等債券売却損＋国債等債券償還損＋国債等債券償却)＋一般貸倒引当金繰入額

2. 業態別の状況

業態別に、2016年度以降のOHRの推移を確認する(図表2)。信用金庫のOHRは、低下傾向にあるものの、都市銀行、地方銀行を上回り推移している。また、第二地方銀行を一時期下回ることもあったが、2021年度以降はやや上回り推移している。

(図表2) 業態別の状況



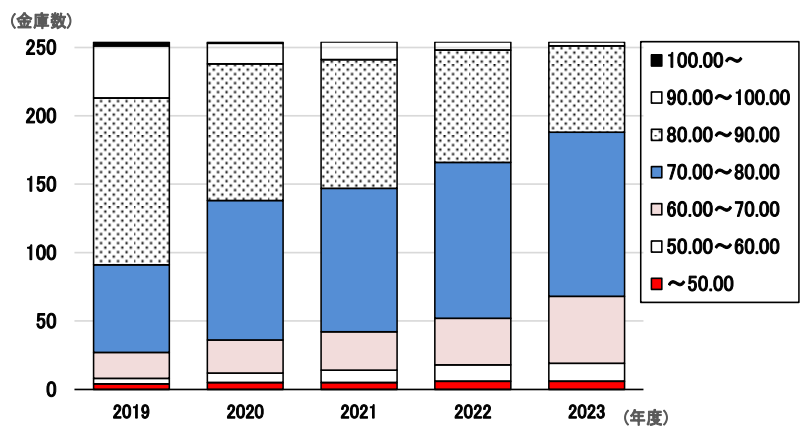
(備考) 1. 信金中央金庫 地域・中小企業研究所作成
2. 他業態は全国銀行協会「全国銀行財務諸表分析」より作成

3. 信用金庫別の状況

次に信用金庫別に、2019～2023年度までの過去5年間ににおけるOHRの分布状況を示す(図表3)。

2019年度は図表の凡例7項目のうち80.00～90.00の信用金庫数が最も多く、2020年度以降は70.00～80.00の信用金庫数が最も多くなっている。一方で、60.00以下の信用金庫数が増加するなど、全体的に低下傾向になっていることが窺える。

(図表3) 信用金庫別の状況



(備考) 信金中央金庫 地域・中小企業研究所作成

また、2期間比較(2019年度と2023年度)での動きを確認したところ、上昇26金庫、低下228金庫と、低下金庫が多くなっている。

今般の分析の結果、全国信用金庫のOHRはこれまで低下傾向であったが、経費額の減少による影響の方が大きく、OHRの低下により大きく寄与してきたことが確認できた。

経費効率をみる指標としては、預金量との対比をみる経費率(経費/(預金積金+譲渡性預金))があるが、OHRは、業務粗利益を稼ぐためにどの程度の経費をかけたかを示す指標であり、比率が低いほど経費効率が高いことを示している。

現在、信用金庫の決算は総じて増収増益の流れにあるが、他業態に比べてOHRは高い比率で推移している。今後、OHRの改善にあたり、さらなる収益性の向上が求められるだろう。

以上

※信用金庫業界の各種データは、信金中央金庫 地域・中小企業研究所ホームページの「信用金庫統計」(<https://www.scbri.jp/publication/toukei/>)に掲載されています。併せて、ご活用ください。

本レポートは発表時点における情報提供を目的としており、文章中の意見に関する部分は執筆者個人の見解となります。したがって、投資・施策実施等についてはご自身の判断をお願いします。また、レポート掲載資料は信頼できると考える各種データに基づき作成していますが、当研究所が正確性及び完全性を保証するものではありません。なお、記述されている予測または執筆者の見解は予告なしに変更することがありますのでご注意ください。